T雄の成長（五）

浜田駒子

四月のある朝、三年生が、「明日から、朝六時に来い」と、命令した。

中学校では、クラブの係の先生がいらっしゃらない時は、練習してはいけないことになっている。違反したものは退部である。

現に、野球部の一年生が勝手に練習して、野球部をやめさせられた。

一年生にとって三年生（すべて先輩とよぶ）は、先生よりこわい。三年生のいうことをきけば、学校のきまりにそむくことになる。

「学校まで歩くのに三〇分かかるから、五時半に家を出なければならない。すると、五時に起きるのか。起きられるかな。あゝもう少ししか眠る時間がない。どうしよう。それに先生に見つかったらどうしようかな」と、心配が先に立って眠れない。

母は叱る。

「起きられなかったらどうしよう。遅刻したら大変だと、くどくどやってないで、一分でも早く眠りなさい。おかあさんがお弁当を作って五時に必ず起こすから、そうしたら起きればいいでしょ」

次の日、朝五時、雨が降っているのでどうしたものか迷いながら起こすと、

「この位の雨なら練習やるかな。もし、練習がなくて教室に入っていて先生に見つかったら困るな」

「近くの三年生の家まで走って行って『今日練習ありますか』ってきいてみたら」

「下手にききに行くと、『きのう六時っていっただろう、わかんねえのかよォ』といわれちゃうよ」

「もし、練習があるのに行かないと、なぐられるの」
「なぐられるんだったらいいよ。いっとき我慢してればそれですんじゃうもの」
「どうされるの」
「練習でしごかれるんだよ。一時間でも二時間でもしごくんだよ。苦しいよ」
「自分で行くかいかないかきめなさい」
「これが幼稚園か小学生なら、おかあさんが先輩の家に行って、〝練習ありますか〟とか〝学校では部の先生がいらっしゃらない時は練習してはいけないといわれていますが、そこのところはどうなっているんでしょう〟とか、わからないところを全部きいて来てあげるんだけど、もう中学生だから、おかあさんは高見の見物としゃれるから自分で解決してね」
「三年生が卒業しなけりゃ解決できないよ」
もう、半泣きである。
その日は行かないことに決め、もう一時間眠り、ふつうの登校時間に家を出た。
翌日、T雄がにらまれているY先輩に、
「おめえ、昨日、六時に来なかったんだってなあ――」と、いわれたそうである。T雄は、
「来なかったんだってな――、というところをみると、Y先輩だって来なかったんだろうに」とおこっていた。
「今日はポンプ室の地ベタにすわらせられて叱られちゃった」
「どうして」
「土曜日はプールサイドで弁当たべるんだって、教室でたべたら『先輩より先に飯くって、いいと思っているのかよォ――』とおこるんだ」
中学校には水泳に明かるいコーチがなく、三年生が、後輩を練習させるだけで、時には先輩の感情でしごいているんじゃないかと親の目には映ることがある。T雄の前ではいえないけれど、そんな不安がある。
毎年々々、小学校で良い記録をつくった人が中学に入ると皆一様に落ちてしまうのはなぜか。
現在、一年生のT雄が三年生の先輩よりもタイムが早いそうである。これはT雄がズバ抜けて早いのではなく、二、三年生が、二、三年の間に一年生よりも遅くなってしまうような練習をしたということではないだろうか。
部の先生は、一度だけ泳がれたそうである。その日は水温十三度で（小学生は二十度以上と文部省できめられている。適温は二十三度）とびこんだけれど、半分まで泳いであがってしまわれた

そうである。
T雄たちはマラソンをして体を温めてから水に入り、またこごえて来るとマラソンをするのだそうだ。それでも、
「おかあさん、体の芯まで冷たくなるって知ってる？　洋服着て授業に出てから、一時間目も、二時間目も体があったまって来ないんだよ」といっているくらいなのに、そんなに冷たい水にとび込まれて、先生はご病気になられなかっただろうか。
それからあと、時々姿を見せられるのだけれど、大抵、泳いでいる方を見ないで、金網に向かって外の女生徒と話をしておられるそうだ。
夕方六時すぎに練習が終わる。
家につくのが七時をすぎる。
すぐ食事をして、八時には床につく。
あしたはまた、五時におきるのだ。
「家にはごはんと寝に帰って来るだけだね」という。
眠る前に本を読む。友だちや図書館からちゃんと借りて来ている。
モンテクリスト伯全五巻を「復讐する時が楽しみ」と一巻一巻読んでいたり、
「おかあさん、ジイドの「せまき門」て読んだことある。最後に、『あなたがおとなになったらもう一度読んでごらんなさい』って書いてあったよ」というから少年少女向けの本らしい。
「ルナールの『にんじん』は何度読んでも、くやしくって」
旧約聖書もよんだ。
その上、忠実というか世話好きというか、妹が毎日、マンガの本を友だちから借りてくると、
「お兄ちゃん、今日も借りて来てあげたわよ」
「そうか、サンキュー」
妹が出さないと、「今日はないか」
「ある、ある」
クラスの皆に口をかけておかなくては、こうも毎日借りられないだろう。
夜、本を読むから、時間ギリギリまで寝ていても、朝おきられない。
中学生になりたての頃、朝一人で起きて出かける時間まで勉強していたことがうそのようだ。
「もう二十分しかないわよ」というと、はね起きて、すぐ洗面所にとびこみ、ガラガラとやって、
「以上」といいながら椅子にこしかけてごはんをたべる。
今までのはみがき、洗面、礼拝、「おはようございます」「いただきます」すべて省略である。
「この頃は、おはようございますがちっとも聞こえないわねえ」

「遅刻しちゃうよ。すべて省いても、ごはんと便所だけは省けないから」とすましていう。

三日目、父に見つかって、

「T雄、お前は顔も洗わんのか！」と一喝されて、やっとまたもとの手続きに戻った。

寒いうちからの激しい練習のせいか、A級の記録を持つ一年生のS君が、胃腸をこわして、医者に泳ぐことを禁じられた。M君もやたらと寒がるようになった。T雄もヒザを痛め、医者通いをした。

自主的ということは、どこまでのものか。

中学三年生にすべて技術的なことや、健康管理をまかせておいていいものだろうか。

そうした不安があるが、親が出て行くのはまずいと思い控えてしまう。

ひざを痛めて練習を休んだ時から、苦手のY先輩がいくらかやさしくなった。

「病院で一週間練習を休むようにいわれましたといったら、Y先輩が一週間でなく、十日休めというんだよ。十日間出て来ちゃいけないって。親切でいってくれたんだか、いやがらせをいっているんだかわからないんだけど」

その後、練習に出るようになっても、泳ぎをなおしてくれたそうである。

先日も、夜Y先輩に逢った。

三年生は修学旅行に行って、まだ帰らないと思って、Y先輩の家の前を通りかかると苦手なY先輩が立っていたのである。

「どこへ行ったんだ。塾か」

「ハイ」

「何の塾だ」

「ピアノです」

「何だ、女みたいな奴だな。三年生のいない間、しっかり練習やったか」

「ハイ、やりました」

「てめえら、二年生どぐるになってサボったんじゃないだろうな」

「さぼりません。じゃあ、お休みなさい」

「達者で暮らせよ」

なかなかユーモラスなおあにいさんである。

クラスの友だち

少し学校になれてクラスの友だちはどうか。

T雄の隣の席は女の子で、成績の良い人らしい。家でよくその人の話が出る。

T雄がテストを返してもらうと、父も、母も、妹も、
「隣の〇〇さんは何点」とつい、きいてしまう。
男の子では、後の席が、「僕よりずうっとたくさん本を読んでいるんだよ」というI君。
前の席の男の子とはうまくいかないという。
「どうして」
「その子、僕と同じ性質だから困るんだな」
「あなたの性質ってどんなの」
「人の先にたって何かやりたい性質、人に命令されてやるのは好きじゃないんだ」
「へえー」
その性質のゆえか、翌日、
「僕、きょう、キャンプの本部役員になったよ」
「一年全体のキャンプ？」
「そう、前から、どうしても本部役員になりたかったから立候補したんだ」
「立候補の好きな人ね、クラスの評議員の選挙にも立候補したし」
「それから本部役員会があって本部長になったよ」
「また、立候補したの？」
「今度は、推薦だよ」
「水泳部の先輩のことでもわかるように、人の先に立つ人は皆の気持になって物事をきめなければならないのよ」
「うん、わかってる」
「威張るのじゃなくて奉仕よ」
「よーく、わかってます」

この頃、気がついた困った点二つ。

その一、

人のミスをよろこぶこと。

二、三人に、英語の書き取りをさせたら、T雄が先に一つまちがえた。すると、友だちに「オイ、お前もまちがえろ、どれどれ、アッこれ、まちがっている、ワーイ、ワーイ」と、手をたたいてよろこぶ。

この子はいつからこんなふうになってしまったのか、と思わず顔をみる。

人の弱点をみつけて喜ぶ、そんな子にならないよう特に気をつけて育てたつもりなのに。

人の悲しみを自分の悲しみと出来る人、人の喜びを自分の喜びと出来る人にしたいと、注意深く来たつもりだし、この子はそのやさしさを持っていると思っていたのに、どこで落として来てしまったのだろうか。

田園調布の頃は持っていた。
大阪でも持っていた。
東京に帰って来ても持っていた。そうだ、ここに来て、六年生の時に、水泳の王者浜田君、○○○の浜田君とチヤホヤされているうちに、いつのまにか落としてしまったのだろう。
人間にとってそれが大事なことを話してきかせよう。
幼い日にそういう心を持っていたことを思い出させよう。

その二、
テストの答案に不注意のミスが目立つ。
英語なら?をつけ忘れたり、大文字で書くべきところを小文字で書いてしまう。
数学なら、小数点のつけ忘れ、（ ）のつけ忘れが目立つ。
これは父に叱られた。
「これは、将来、社会に出た時に困る。社会では不注意のミスは許されないからだ」という。
中学生のうちに〃うっかり〃の芽を徹底的につんでおきたいと父母で話し合った。
母は日常生活をもう少しキチンとすることにきびしくすることにした。
勉強の道具を忘れることはないが、ちょっとしたものを忘れる

保育学年報 1968年度

特集　〈保育者—現状と問題点〉

日本保育学会編　B５判　定価 3,000円　〒90円

■その年の保育に関することがらが網羅された貴重な文献です。
■日本保育学会によって1962年より毎年編集され、保育にたずさわる多くの方々により好評を博してきました。
■分りやすく内容が整理されており、すべての幼稚園、保育園、保育者の養成機関、研究所に具備して頂きたい書です。

第１部　毎年開催される日本保育学会において発表された研究の集録
第２部　その年度の国内のみならず海外におよぶ総合的文献目録
第３部　幼児文化財、保育関係団体、保育者養成機関、保育行政、保育学と保育に関するすべての動きを集録
第４部　毎年特集として貴重な資料を掲載

発行所　株式会社フレーベル館

ことがある。

お弁当を鞄に入れてあげようと思ったが、鞄が一杯なのでどうするときくと、マジックバッグに入れて行くといってそのマジックバッグだけ持ってお弁当を置いていってしまう、という具合だ。

父は、今まで、俺は俺の仕事をすると仕事第一で、子どもたちとは精神的に大分はなれたところにいた。母は、その橋渡しをしていたが、この頃は、自分で事業を始めたこともあって、自分の仕事の夢を母にも子どもにも語り始めた。

自分の研究の実験データを子どもたちにもみせ、

「こうやって一つ一つたんねんに、正確に書いて行くんだぞ」と話してくれる。

自分の仕事を具体的に理解させると同時に、〃うっかり〃は許されないんだぞとT雄にいいたいらしい。

また、この頃、T雄の将棋の相手をしてやる。T雄が考えずに打つと、

「あとでその手はムダだったと思わないように十分考えてから打て」と叱る。

今夜も将棋をしている。

もう九時半になる。明日の朝もT雄は練習があるからもう寝た方がいいのにと母はハラハラする。

父は「鍛えねば」という顔をして、ドッシリ構え、自ら、長く長く考えて一手を打つ。

☆　☆

五回にわたって「T雄の成長」を載せました。一応、ここでおわります。

なお本誌、60巻4号から12号まで＝幼稚園に入園するまで—T雄の記録(4号)、入園前の子どもの一日(5号)、T雄の入園—母親の記録より(6号)、幼稚園に入園して(7号)、T雄君の幼稚園生活—入園後一月半(8号)、一学期を過ぎて(10号)、夏を終って(12号)＝にT雄の幼稚園時代のことがくわしく載っています。ご参照下さい。

幼児の教育　第六十八巻　第十号

十月号　©　定価八〇円

昭和四十四年九月二十五日　印刷
昭和四十四年十月　一　日　発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします